

岩手の風土記シリーズ（22） 吉里吉里（きりきり）の郷を訪ねて

みなさんは、かつて陸奥（みちのく）の紀伊国屋文左衛門と言われた、大富豪がこの岩手の地にいたことをご存知でしょうか？その人は吉里吉里善兵衛こと前川善兵衛その人である。今回は、この前川善兵衛の人物像と、その住んでいた吉里吉里の郷について語ろう。まずは吉里吉里の住所は、岩手県下閉伊郡大槌町吉里吉里ということになる。鉄道だと三陸鉄道リアス線できりきり駅、車で三陸沿岸道路大槌IC下車、もしくは国道45号線の釜石と宮古の間という事になる。盛岡からだだと、車で2時間弱の距離である。この吉里吉里という地名の由来は、アイヌ語で白い砂浜を意味すると言われ、この砂浜を歩くと「キリキリ」と音がするとか？また、以前井上ひさし氏著の「吉里吉里人」で一躍脚光を浴びた場所でもある。もっとも小説上の吉里吉里国は、現在の岩手と宮城の県境の内陸部だったようだ。さてこの吉里吉里善兵衛は如何なる人物だったのだろうか？過去には大槌祭りで、俳優の松方弘樹さんや原田大二郎さんが来県して演じてくれたようだが、三都（江戸、大阪、京都）に名が聞こえたと言われる、江戸時代の大富豪である。先祖は小田原北条氏（現神奈川県）に仕えていたという。天保18年（1847年）に豊臣秀吉の小田原征伐があり、落城をして奥州気仙浦（現大船渡界限か）に逃れ、やがて閉郡吉里吉里浦に移り住んだとされる。初代は前川甚右衛門で、二代目からは代々善兵衛を名乗っている。特に二代目善兵衛富永は、広く三陸沿岸の漁業権を掌握し、自ら建造した数隻の大型廻船により海産物等の集荷と廻送を行い、廻船問屋として台頭して、巨万の富を築いていった。宝暦3年（1753年）に幕府より日光東照宮修復の命令を受けた南部藩は、費用70,000両を藩内の豪商や士分に振り当てた。盛岡城下の116人の商人が合計4,800両を出したが、この時善兵衛は個人で7,500両もの大金を収めている。そのほか、大飢饉の際には私財をなげうって炊き出しをしたという記録も残っているという。また、大槌地方の郷土芸能の代表である「虎舞（とらまい）」は、近松門左衛門の人形浄瑠璃の一つ「国性爺合戦（こくせんやがっせん）」から創作され、江戸で大人気だった浄瑠璃を観て感動し、虎退治の場面を吉里吉里で再現したのが始まりだそうだ。岩手の沿岸南部には虎舞を舞う地域があちこちにあり、釜石、大船渡でも虎舞が郷土芸能として根付いている。このルーツが大槌だったとは初めて知った次第である。一方、前川善兵衛は武士としての名であり、商売上は「大槌浦東屋孫八（あずまやまごはち）」を名乗っていた。この孫八の名は、江戸に塩引の鮭を供給し「南



大槌IC下車、もしくは国道45号線の釜石と宮古の間という事になる。盛岡からだだと、車で2時間弱の距離である。この吉里吉里という地名の由来は、アイヌ語で白い砂浜を意味すると言われ、この砂浜を歩くと「キリキリ」と音がするとか？また、以前井上ひさし氏著の「吉里吉里人」で一躍脚光を浴びた場所でもある。もっとも小説上の吉里吉里国は、現在の岩手と宮城の県境の内陸部だったようだ。さてこの吉里吉里善兵衛は如何なる人物だったのだろうか？過去には大槌祭りで、俳優の松方弘樹さんや原田大二郎さんが来県して演じてくれたようだが、三都（江戸、大阪、京都）に名が聞こえたと言われる、江戸時代の大富豪である。先祖は小田原北条氏（現神奈川県）に仕えていたという。天保18年（1847年）に豊臣秀吉の小田原征伐があり、落城をして奥州気仙浦（現大船渡界限か）に逃れ、やがて閉郡吉里吉里浦に移り住んだとされる。初代は前川甚右衛門で、二代目からは代々善兵衛を名乗っている。特に二代目善兵衛富永は、広く三陸沿岸の漁業権を掌握し、自ら建造した数隻の大型廻船により海産物等の集荷と廻送を行い、廻船問屋として台頭して、巨万の富を築いていった。宝暦3年（1753年）に幕府より日光東照宮修復の命令を受けた南部藩は、費用70,000両を藩内の豪商や士分に振り当てた。盛岡城下の116人の商人が合計4,800両を出したが、この時善兵衛は個人で7,500両もの大金を収めている。そのほか、大飢饉の際には私財をなげうって炊き出しをしたという記録も残っているという。また、

大槌地方の郷土芸能の代表である「虎舞（とらまい）」は、近松門左衛門の人形浄瑠璃の一つ「国性爺合戦（こくせんやがっせん）」から創作され、江戸で大人気だった浄瑠璃を観て感動し、虎退治の場面を吉里吉里で再現したのが始まりだそうだ。岩手の沿岸南部には虎舞を舞う地域があちこちにあり、釜石、大船渡でも虎舞が郷土芸能として根付いている。このルーツが大槌だったとは初めて知った次第である。一方、前川善兵衛は武士としての名であり、商売上は「大槌浦東屋孫八（あずまやまごはち）」を名乗っていた。この孫八の名は、江戸に塩引の鮭を供給し「南



大槌浦東屋孫八（あずまやまごはち）」を名乗っていた。この孫八の名は、江戸に塩引の鮭を供給し「南

部の鼻曲り鮭」で名を博した中世の大槌城主「大槌孫八郎」にちなんだものと推測される。この大槌孫八郎なる人物は、豊臣秀吉の時代に、大槌城主だった人物で、当時から大槌の特産であった鮭を首都圏へ売り込もうとして、新巻鮭（塩鮭）の製造手法を開発した人である。従って新巻鮭の発祥地、元祖が大槌という事になる。さらにはこの人物は当時遠野郷の城主との争い、果ては九戸政実の乱へ豊臣側としての参戦、さらには南部藩主との抗争等、非常に興味ある人物であるが、詳細は別の機会としよう。このように江戸に物資を運ぶための太平洋航路を開拓し、南部藩の財政を支えた「海の豪商」前川善兵衛。その偉大な業績はまだ十分に明らかになっておらず、ミステリアスな部分が多いと言われている。さて、この大槌にはもう一つ井上ひさし氏由来のものがあり、それは大槌湾に浮かぶ「蓬莱島（ほうらいじま）」である。この小島は、大小ふたつの大岩が連なる周囲 200m の小さな島で、「ひょうたん島」の愛称で知られている。海の守り神である弁財天が祀られていることから、地元の人々は親しみを込めて「弁天様」と呼ぶそうだ。筆者が幼少のころ TV で流れていた「ひょっこりひょうたん島」のモデルになったと言われる小さな小島である。これは氏の母親が釜石で仕事をしていた関係で、母親の元を訪ねた氏が隣町の大槌を訪ねた時の記憶が基になったものと推察する。又この蓬莱島を見下ろす高台には意外な建物が立っていた。東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターである。このセンターは、2018 年に再建された建物で、2021 年 4 月に展示資料館「海の勉強室」が新たに開設され、見学もできるようだ。最後に大槌は海産物も豊富である。当然町内のグルメスポットも多くある。残念ながら善兵衛の子孫が経営する「吉里吉里善兵衛」という海鮮料理屋は閉店していたので、今回は国道 45 号線沿いの海鮮料理のお店「さんずろ屋」で食事をとった。人気店らしく平日にもかかわらず結構混んでいた。磯ラーメンとミニうに丼のセットと海鮮丼を選択した。海鮮丼は肉厚の刺身がたっぷりに入った逸品であった、ぜひ近くに行った際は立ち寄ってみては如何でしょうか。



参考資料

大槌町産業振興課発行「おおつちひょっこり旅ガイド」

大槌図書館「おしゃっち」蔵 「前川善兵衛」

東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターホームページ